

516 いわゆる super bone image を呈した前立腺癌症例の検討

吉越富久夫, 町田豊平, 大石幸彦, 上田正山
木戸 見, 柳沢宗利 (慈大-泌)
三木 誠 (東京医大-泌)

全身骨シンチグラムは前立腺癌患者の骨転移の有無、骨転移巣の広がりや進展の程度を把握する上で重要であることを昨年の本学会でも報告したが、今回は全身骨シンチグラム上いわゆる super bone image を呈した前立腺癌症例について報告する。

対象とした症例は前立腺癌の診断のもとに抗男性ホルモン療法を主体に治療し、全身骨シンチグラムを行えた 229 症例で、このうち Stage IV の 4 例で super bone image を示した。2 例は治療開始時、2 例は治療経過中に全身骨シンチグラムで super bone image を呈した。

治療開始時全身骨シンチグラムで super bone image を示した 2 例では約 1 年で骨シンチグラムは著しく改善し、5 年、2 年後の現在経過良好であるが、治療経過中に super bone image を示した 2 例は予後不良であった。

super bone image を示す前立腺癌症例の中にも良好な経過を示す例があり、血清 PAP 値、組織所見などについて検討する。

517 乳癌患者の骨シンチグラフィ：術後経過観察中に骨転移が証明された 7 例の検討

永井清久, 福永仁夫, 大塚信昭, 曾根照喜,
村中 明, 古川高子, 柳元真一, 友光達志,
森田陸司 (川崎医大 核) 大浜寿博,
園尾博司, 妹尾巨明 (川崎医大 内分泌外)

乳癌は高率に骨転移を来すことが知られている。したがってできるだけ早期に、しかも正確に骨転移の診断を確立することが望まれる。今回、我々は乳癌患者 208 例について術前および術後、経時的に (最長 8 年間)、Tc-99m 標識リン酸化合物による骨シンチを行い、術後経過観察における骨シンチの有用性を検討したので報告する。骨転移の確診は断層像に行い、さらに診断が困難な症例は骨生検を施行した。術前の骨シンチで何ら異常所見を認めなかった症例は 162 例であった。6 か月ごとに骨シンチを再検したところ、術後経過観察中 7 例に骨転移が証明された。これらの症例は比較的年齢の若い層に多くみられた。骨転移の発見までの期間は術後 16.1 か月であった。骨転移部位は腰椎 4、胸椎 3、骨盤骨 2、胸骨 1、大腿骨 1 に観察され、stage 分類との関係では I-1 例、II-3 例、III-3 例に骨転移が認められた。乳癌では、術前に骨転移の所見が見られなくても、経過観察中に出現する例があるので、定期的な骨シンチ検査が必要かと思われた。

518 乳癌患者の骨シンチグラム 術前骨シンチグラムを施行した 329 例の follow-up 結果について

井上善弘, 本田憲業 (三井記念病院放射線科)

すべての乳癌患者に術前、術後定期的に骨シンチグラムをおこなうべきかは論議のあるところである。われわれは術前骨シンチグラムを施行した 329 例の原発乳癌患者を定期的に follow-up し、骨転移の発現を TNM 分類に従って各群毎に検索した。検索の期間は 1～8 年、平均 30 ヶ月である。骨転移の発現した患者は 47 名 (14.3%) でその内 34 名が死亡している。各群毎の発現率をみると、T₁ 群 6% (5/82), T₂ 群 11.1% (21/189), T₃ 群 39.4% (15/38), T₄ 群 9.6% (6/20) である。リンパ節転移群では 26.4% (37/140)、無転移群では 5.3% (10/189) であった。

骨転移の発現は、手術後 2 年以内が 5.3% (25/47)、3 年以内 8.3% (39/47) である。

519 乳癌治療上における bone scan の問題点

藤井広一, 熊野町子, 馬淵順久, 進藤 哲,
中川賢一, 入沢 実, 浜田辰巳, 石田 修,
岩佐善二* (近大 放 一外*)
梶田明義 (大阪成人病セ 放)

乳癌の予後を左右する因子の一つに骨転移の有無がある。骨シンチグラフィは、骨転移の早期発見に有用であり、術前の M 因子の判定に、又、術後の経過観察に、不可欠な検査法となっている。その反面、変形性脊椎症などでの偽陽性例も多く、骨転移の有無の判定は必ずしも容易でない。一方、骨転移と診断された症例では、各種治療による骨シンチグラム上の変化が、その治療効果の判定に役を担っている。しかし、骨シンチグラム上、治療による変化を認めない症例も経験することがある。今回我々は、1978 年 6 月～1985 年 4 月までの約 7 年間に、当院放射線科で骨シンチグラフィを施行した乳癌患者を対象として、転移の有無及び治療効果に関して、T 因子、N 因子、腫瘍占拠部位、組織型、治療法など、種々の臨床的観点から、retrospective に検討し、若干の知見、問題点を報告する。